

7 モルモットの飼育箱について

○山口進也
(横浜市立野毛山動物園)

横浜市立野毛山動物園は「誰もが気軽に訪れ、憩い、癒される動物園 小さな子どもが初めて動物に出会い、ふれあい、命を感じる動物園」というコンセプトのもとに運営されている。園内のなかよし広場は、モルモット・ハツカネズミ・ニワトリとふれあうことができる施設でありコンセプトの一端を担っている。

2017年、モルモットの飼育箱が経年劣化による腐食で更新が必要となった。新しい飼育箱と、更新に向けて試みていた飼育環境改善によるモルモットの変化について報告する。

なかよし広場で飼育するモルモットはオス 34 頭（去勢含む）、メス 194 頭で、ふれあいに活用しているモルモットは去勢オス 9 頭、メス 124 頭である。モルモットを飼育する箱は奥行 97 cm、幅 245 cm、高さ 30 cmの長方形で、中央を仕切り二部屋として使用している。また箱自体を高さ 49 cmの位置まで上げ、作業者の身体（腰）の負担を軽減している。箱の床は約 1 cm幅のステンレスメッシュが張られ、糞尿が床下に落ちる作りとなっている。

床のステンレスメッシュによってモルモットの足に負担が掛かり、足底皮膚炎の原因となっている疑いがあったため、飼育環境改善の試みとして 2016 年より床の一角に板を敷き始めた。2017 年 9 月からは稲わらとウッドチップの試験使用を始め、それぞれの作業性や汚れ具合、モルモットの様子などからウッドチップを本格的に使い始めた。11 月に更新した新しい飼育箱でもウッドチップを使用できるよう、専用の中敷きを作成している。

2016 年 1 月以降の足底皮膚炎の発症頭数を分析すると、散発的かつコンスタントに月 1～5 頭発症していたが、2018 年 2 月以降は見られなくなった。前述のような 2016 年から 2017 年 11 月にかけての飼育環境改善の試みと照らし合わせると、ウッドチップを床材として使用することがモルモットの足への負担を軽減し、足底皮膚炎の発症を抑えることに繋がっていることが示唆された。